

# 栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	京都府
推進地域名	京都市

## 1. 事業推進の体制

- ・京都府教育委員会,京都市教育委員会,京都市認定食育指導員,上鳥羽農協,京都市西部農業振興センター,PTA,京都女子大学の教授などの方々をメンバーとする食育検討委員会を組織し,事業を推進した。
- ・校内食育プロジェクト(本校の食育の主題,取組の重点,食に関する指導の全体計画,学年の目当てと指導計画,研究組織等について)を中心に栄養教諭の指導・助言のもと教育計画を立案,検討し,食に関する様々な取組を通して,家庭や地域との連携を図りながら食生活の改善を推進した。

## 2. 具体的取組等について

テーマ1	<p>体験活動を軸とした学ぶ喜びを味わえる授業展開とその工夫</p> <p>規則正しい生活習慣を確立するための食習慣・運動習慣・学習習慣等の形成</p>
	<p>学校・家庭・地域が一体となった「地域ぐるみの食育の推進」を図る研究体制の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上鳥羽小学校の目指す子ども像「げんきな子(体)」を育むため,校内に食育プロジェクトを設置し,「食から健康な体づくりについて考え実践する子どもを育む」というテーマを設定し,健康な体づくりを推進する子どもの育成を目指す食に関する指導の全体計画の作成と,各学年の年間指導計画を作成し実践に取り組んだ。</li> <li>・各学年のカリキュラムに食に関する指導の時間(年間指導計画)を設定し,教職員間で共通理解を図り,年間を通して指導を進めるように計画し取組を進めた。</li> <li>・学校運営協議会をはじめ,食に関わる各種団体等と連携を図り,地域人材や地域素材を活用する幅広い食育の推進と充実した体験活動を実施した。</li> </ul> <p>栄養教諭を中核とした取組の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保健主事や養護教諭とも連携しながら,よりよい食生活と生活習慣の向上に向けて,児童の生活実態や食実態を把握し調査研究を行った。(さわやか教室の実施,食に関するアンケートの実施と考察等)</li> <li>・学級担任と連携し,子どもたち一人一人の食の実態を把握し,学級全体だけでなく一人一人の児童の「食」の課題を見つけ,その児童の課題にあった食の指導を展開した。</li> <li>・「食」に課題をもつ児童への個別指導にあたり,家庭と担任・養護教諭や管理職とも連携をとり課題解決を図った。(給食時間の個別指導,保護者への働きかけなど)</li> <li>・毎月1回「ぱくぱくだより」(給食便り)を作成し家庭配布を行った。また,給食に関する児童の感想(「ふりかえりんご」)の掲示も行っている。さらに学校HPで取組を知らせたり毎月20日を「食を考える日」に設定したりするなど家庭への働きかけに取組んだ。</li> <li>・地域や学校の取組を支援する団体等との連絡・調整を行い,食に関する指導等の具体的な関わり方についての指導・助言を行った。</li> </ul> <p>体験活動を重視した活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上鳥羽農協や西部農業指導センターと連携しながら農育活動を推進した。全学年の児童が実際に土にふれ,野菜を栽培できるような年間計画を立て実践した。</li> <li>・水田づくりや井戸掘りなどの勤労体験を通して,農作物を作るための苦労や努力を経験し食物を大切に作る態度を養った。</li> <li>・自然体験活動の中に,自らが食材を探したり釜戸を使って自炊をしたりする活動を組み入れることで,友だちと協力して食事を作ることの大切さや喜びを味わわせた。</li> </ul>



教科と関連させて体験したことを授業に生かす

- ・ 1年 国語科の単元と生活科の単元をつなげていき農作物の栽培に関連させるようにした。
- ・ 2年 生活科で栽培してきた野菜を味わい、食材の味を4つの味で味わいを表現する授業を設けていくことで、より食物に対し興味関心を持ち意欲的に口に運ぼうとする姿がみられるようになった。
- ・ 3年 国語科での食に関する単元では、実際に栽培した農作物（枝豆）を用いながら文章と照らしあわせることで、児童にとってよく分かり楽しい授業を展開した。
- ・ 5年 総合的な学習の中で、栽培・収穫したもち米を使用して雑煮づくりを体験したが家庭科の単元とも関連させ、児童が主体的においしく栄養バランスのとれた雑煮づくりをすることができた。また社会科についても関連を持ち理解を深めることができた。
- ・ 6年 総合的な学習と家庭科を関連づけ、だしを使った一食分の料理をつくることに取組んだ。また日本食の良さについて考える時間も設け、食文化や食にかかわる歴史に対する理解を深めることができた。
- ・ 全学年を通して社会科や生活・総合的な学習では、実際に農作物を栽培・出荷しておられる地域の農家の方に協力してもらい、土づくりから畝づくり、種まきと農業的な体験を通して単元のねらいに迫る授業を展開することができた。



## テーマ2 学校と家庭との連携による食に関する指導の充実のための取組

### よりよい食生活のための家庭に対する効果的な方策に関する調査研究

参観・懇談・研究発表会・家庭教育学級等で食育に関する啓発の実施

- ・ 全校で、授業参観日に食に関する指導の時間を設定し、保護者にも学習内容を理解していただき、児童の家庭での実践を支援していただくようにした。また家庭教育学級では地域消防署員の方を講師にお招きし「防災クッキング」を実施した。非常時における食事作りを教えていただき、現在の食環境について振り返るとともに食の重要性を再認識することができた。次年度入学生の保護者を対象とした「子育て講座」や新1年生を対象とした「給食試食会」なども意図的に学校行事に組み込んで、食育への認識を高めることで、学校の食に関する取組や給食に対する理解をはたらきかけた。

基本的な生活習慣確立に向けた取組の推進

- ・ 児童に生活アンケート調査を実施し、アンケート結果をもとに、授業参観後の懇談会で「早寝・早起き・朝ごはん」に関する児童の実態と取組の大切さについて説くことで、保護者が支援の必要性を認識することができた。
- ・ 親子チャレンジ体験活動『朝ごはんにチャレンジ』を実施し、親子で協力して朝ごはんを作ることで、休日の共食のきっかけとなるとともに、朝食の内容についても栄養面等で理解を深めた。高学年に対しては自分で調理ができるような献立を工夫し、実践につながるようにした。
- ・ 栄養教諭や養護教諭と連携した『さわやか教室（健康教室）』の個人懇談を行い、学校と家庭との連携を図る取組の中で、家庭の協力を得ながら、児童一人一人の健康管理につとめた。
- ・ 生活が不規則になりがちな長期休業では、生徒指導部・人権教育部と連携しながら、「食」に主眼を置いて日課表の作成と毎日の生活点検を行い、よりよい生活習慣の定着を図った。



食に関するアンケート調査の実施

- ・ 保護者に対して食に関するアンケート調査を行い、「食育」に対する意識・食生活について分析し、その結果に基づき保護者啓発や家庭での支援のあり方を考えるとともに児童への指導や授業計画の作成等に活用した。

## テーマ3 食育に係わる地域素材の有効活用に向けた地域ぐるみの食育推進事業の取組

### 学校と地域及び大学や企業等との連携による食育充実のための取組

### 地域の人材・食材・環境を生かした地域ぐるみの食育推進事業の実施

- ・本校の学区は京野菜の産地としても有名である。その環境を生かし、京野菜についての知識を得たり栽培されている農家の方の知恵や工夫、苦勞等について理解を深めたりするために、古くから栽培されてきた「金時にんじん」や「九条ねぎ」「水菜」「壬生菜」の栽培活動をすすめてきた。講師に、実際に栽培されている地域の農家の方をお迎えし、指導していただきながら、また知恵や工夫を教わりながら栽培活動が出来、児童にとってとても充実した活動となった。栽培地には学校園のほか地域の畑も借りることで、農家の方の仕事を体感することができた。また、たくさんの作物を収穫させていただき、京野菜に愛着をもったり、苦手感じていた野菜でも進んで食べてみようとしたりする児童が増えた。
- ・収穫した野菜を使った料理活動も重視している。学年の発達段階を考慮しながら、簡単な調理から本格的な調理（6年生は日本料理アカデミーとの連携による京料理体験）をし、児童が収穫した野菜を大事においしく食べることができるように取り組んだ。この結果、給食の時間では、苦手な野菜があっても進んで食べようとする姿が見られたり、食物の命を感じながら大切に食べようという姿が見られたりするようになってきた。

### 京都女子大学や関係機関との連携の推進

- ・京都女子大学教授による校内研修の実施を行い、教職員全員が「食」に関する今日的課題や児童の姿、学校での取組等について講義を受け、自校の「食」の課題について共通理解をはかることができた。
- ・大学生との協力指導により、多様な取組が可能となり（魚料理体験や餅つき・雑煮づくりでの協力など）、児童の興味関心をより高めるような食に関する指導の充実を図ることができた。
- ・日本料理アカデミーとの連携により、6年生の家庭科「まかせてね！きょうのごはん」のカリキュラムに、プロの料理人をゲストティーチャー（講師）に招き、学習をすすめた。そのため、出汁のよさや昔から食されている食べ物について興味や関心をもち、日本の料理のよさを体感することができ、授業の理解を深めることができた。

### 「朝ごはん100%」の取組の推進

- ・児童の朝食喫食率100%を目指すために、学校運営協議会をはじめとする地域の団体等とも連携をとって「朝ごはん100%」の取組を展開した。
- ・地域やPTAと連携して学校の食育の取組について家庭や地域の支援を求めるポスターの作成や配布を行い、学校発行の広報紙にも食育の重要性や取組を載せて啓発を行ったことで、地域からの学校への協力の申し出が増えてきた。

### 豊かな食生活を送るための取組

- ・部活動や土曜学習で地域におられる茶道教授の方の協力の下、児童が茶道体験を通して日本の伝統文化のよさに触れることができた。また、茶道の活動を通して食文化を中心とした「食」の広がりを図ることができた。
- ・PTA主催の『わいわい広場』では、地域でうどん店を営まれている方を講師として迎え、親子でうどん打ち体験をすることができた。親子での調理体験は食の楽しさを共有することができ、また共食の良さを再認識することができた。



## テーマ1～3に共通する具体的計画

### 栄養教諭を中核とした食育の取組として

- ・上鳥羽スタンダード（指導計画）の中に、食育の授業を意図的、計画的に組み込み、その学年に適した目当てを設定し全校で取組を積んでいくようにした。
- ・農育の「栽培ごよみ」を完成させ、畑の利用や収穫に関する取組を教科・領域と関連づけるとともに、見通しを持って活動に取組むことができた。また取組で得た知識等を活用した体験活動の充実を図った。
- ・栄養教諭は、自身の力量を高めるために、例えば食に関する研究大会や研修会に積極的に参加した。また、そこで食育に関する実践報告や様々な情報等を教職員に伝達し、共通理解を図りながら自校の取組の発展や質的向上を図っていった。

食育についてのさらなる意識の改革を図るために

- ・教職員一人一人が、取組の中から新たな食に関わる課題を見つけて明確化し、次年度の取組に生かすようにした。具体的な取組としてどのように食に関する指導を取組むことができるかをまとめたものは、次年度の教職員に引き継ぎ次年度の計画をたてるようにした。
- ・地域・家庭に向けて食育の認識を深めるために体験的な活動等を含めた懇談会や学習会を意図的に開催するとともに、本校の食育の取組についても理解していただくようにした。

児童の変容のために

- ・指導前後の児童の「食」に関わる変容を捉えて、指導の成果と新たな課題を明確にし、一人一人の児童の課題解決に向けた授業構築を行い、実践を図った。
- ・「食」を含めた自分の健康を意識させるために、「自分のからだ」(広報紙)や健康カードの活用を図るようにした。
- ・児童が学習したことについて家庭でも実践しようとすることを保護者に伝え、家庭との連携を図りながら児童が家庭でもよりよい活動ができるようにした。



## 数字で変化のあった事項について

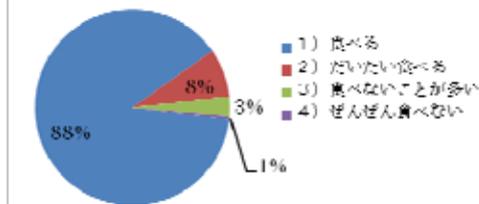
・本年度実施したアンケートの結果、朝食の喫食率について 食べている児童(毎日食べている・だいたい食べている)が96%,食べていない児童が4%だった。平成22年度の95%からほぼかわらないように見える結果であるが、1%改善できたことは、担任や栄養教諭の地道な取組が、なかなか改善の見られなかった児童や家庭を動かしたことに大きな意義をもつ。

現在、食べないと答える児童が、朝食に必要性を感じ、朝食を食べることができる生活リズムとなるよう、今後も家庭と連携した取組を粘り強く進めていきたい。

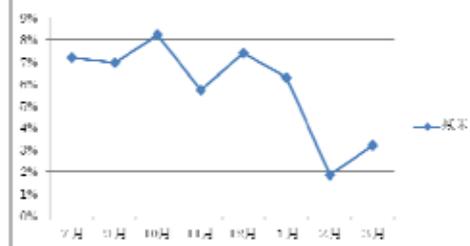
・給食の残菜量の変化については、7月から米飯の残量を月毎に調査し、比較を行った。その結果、7・8月の7%であったものが、2月・3月には2~3%となり、減少傾向にあることが認められた。従来、おらずに比べて米飯の残量の割合が多くなる傾向が見られたが、給食週間の取組やこれまでの栽培活動を通して全校で残さず食べようという意識が高まってきたことが、このような結果につながったものと考えられる。

今年度高まってきた食に関する感謝の心を次年度も育てていけるよう、取組をすすめていきたい。

4) 朝ごはんの有無



残米の割合



## 事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- ・栄養教諭が中心となって食に関する全体計画や指導計画を立案し、食に関する具体的な指導に関わってきたことで、教職員の食育への認識が深まり、児童の食実態に関心を高め、課題を明らかにして実際の指導に生かしてきた。この結果、偏食をしていた児童に改善傾向が見られたり、すすんで食べようという意欲が表れてきたり、また給食の残菜をなくしていくことについて学級全体で取組んでいくことができた。
- ・地域で農家を営んでいる方を招いて作物の栽培活動に取り組んだことで、多様な作物を栽培したり収穫したりする体験活動を行うことができ、地元で作られている野菜に関心が高まるとともに、地域の方への親しみも増して、挨拶や会話等をよくするようになってきた。
- ・栽培活動として、土づくり、畝づくり、種まき・水やり・草取り・収穫という流れを体験することで、実際に農作物が作られているということを感じ、農家の人々の苦労なども実感できた。特に学校園では意欲をもって栽培活動に取り組もうとする児童が増えてきた。
- ・栽培活動から調理までを児童の活動としてすすめることで、児童が食に関して興味関心を深めていることがうかがえる。保護者から家庭で実践しているという声が多数寄せられてきた。
- ・上鳥羽農協、食育指導員、西部農業指導センターなどとの連携した取り組みを進める中で、地域全部が一緒になって本校の食育の取組を支援していこうという意識が高まり、いろいろな取組のアイデアをたくさんいただくことができ、本校の食育の取組が活性化していった。

## 今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- ・食に関する指導や栽培活動を教科・領域を関連づけることに対し、教職員が食に関する指導の視点を明確にして指導をすすめていくことに関し更に意識を高めていきたい。そのために、教室ごとに食育コーナーを設けるなど、先進校の取組から学んだ事例を栄養教諭が積極的に発信・提案することを通して、個々の取組を学校全体の取組へとつなげていく役割の中核を栄養教諭が担っていくことが期待される。
- ・保護者の食育に対する認識がまだ十分に高まっているとは言い難い。保護者に対する啓発だけではこの課題の解決は図れないと考える。食事の楽しさや作物を育てることの喜びなどを実際に体験するような活動の場を設定すれば、保護者の食育への興味や関心が増し、家庭でのわが子への具体的な支援に結びつくのではないかと考える。
- ・農作物の栽培を実際に行っているが、農家や食育指導員に頼るところも大きい。子ども自らが汗をかい「がんばったから収穫できた。」というような充実感がもてるような活動や取組を考え、実践していきたい。
- ・朝ごはんを食べてくる児童の割合について、少し改善が見られたとは言え、未だ欠食の児童もいる状態である。毎日食べてきているという児童についても、その食事の内容を見れば、栄養のバランスが取れておらず、インスタント食品に頼っているというようなケースも見受けられる。家庭に働きかけて、できるだけ手づくりで栄養バランスのある朝食を児童が食べられるように、今以上に家庭と連携を図っていきたい。また、高学年の児童には、栄養バランスの面を考えて、自分でも食事が用意できるように、実践力の向上を図る取組を考えていきたい。